

# 12月号 ごあいさつ

## With コロナ時代 - 先人・先哲に学ぶ！

### “機に臨み、変に応ず” 融通無碍(ゆうずうむげ)に対処!!

株式会社 山西 あすなる会顧問  
代表取締役社長 西 垣 洋 一

新型コロナウイルスのワクチン開発の面で大きな進展との明るいニュースはあるものの、国内では感染拡大の第3波が襲来、国内新規感染者は連日2000人超となり、病床利用率も上昇、医療機関の負荷も増えています。コロナ感染症対策分科会においては「このままいくと国民の努力だけではコントロールが難しく、さらに強い対応をしないといけない事態になる」とし、「感染対策の徹底が図られないと強い経済社会の抑制をせざるを得ない可能性がある」と訴えています。只、現在の社会・経済状況では緊急事態宣言のような大規模な経済活動の停止は不可能であり、更なる感染防止策の徹底を図り、コロナと経済の両立を図る取組みを強化しなければならない状況です。

「わざわざ」と訓読みする字は、「災」と「禍」の2つがあります。易経では、「災」は自然発生的な天災を意味し、「禍」は、戦禍や舌禍など人間が引き起こす出来事であると説いています。人が引き起こしたことであれば、人類の英知を結集すれば、必ずや解決できるのです。歴史を紐解いても、免疫を持たない病原体はときに爆発的に感染を広げ、社会を大きく揺るがして来ました。世界的には、欧州で14世紀に大流行した「黒死病(ペスト)」、20世紀初めの第1世界大戦中のインフルエンザの「スペインかぜ」が猛威を奮い、日本でも奈良時代には「天然痘」が大流行しました。奈良の大仏さまは、この国難に悩んだ聖武天皇が743年、国家の安寧や疫病から人々が救われることを願い造立を命じたものです。正に「人類の歴史は、感染症との闘い」の歴史とも言えます。そしてその都度人類は、力を合わせて「禍」に打ち勝ち、現在に至っているのです。只、人は「禍」の真只中では、不安を感じ悲観し、立ちすくんでしまいます。

松下幸之助はそのような状況の中でも「悲運と思われるような場合には、悲観し絶望しやすいのが人間であるが、しかしそういう場合でも希望を失わず、その日その日を真剣に生きていくよう心がけてゆくとときに、思わざるところから道がひらけてくるものではないだろうか」と説いています。

そして敗戦後の混乱が続く1947(昭和22)年1月、松下電器産業の再建に臨む松下幸之助は、年初の経営方針発表会で社員に向けて、いかなる変化にも立ち向かう覚悟を持つよう訴えました。(右参照)

「今日のこのような状況下においては、1ヶ年の方針を立てることはできません。やむを得ずに行き当たりばつたりの経営も覚悟しなければならないのです。この考えを押しつめれば、時に応じて“融通無碍”、すなわち、どう変化しようなるとも、情勢に順応して展開させるという信念に立つことです。」

幸之助翁経営哲学の真髄である「素直な心」の働きの1つをこの“融通無碍”で説明しています。“融通無碍”とは、1つの見方考え方にとらわれるのではなく、自由自在にものを見、考え方を換え、よりよく対処していくことです。流れる水は、いかなる障害物に出会おうとも少しも苦しめず、サラリと回って流れ続けます。「素直な心」をもてば、どんな困難に直面しても融通無碍に対処して、自らの歩みをスムーズに進めることができると説いています。

「コロナ禍」に直面し、感染の恐怖に脅え、Withコロナ時代に起こっているパラダイムシフトに怯んでいる私たちにとって、幸之助翁が経営方針発表会で社員を叱咤激励したように、いかなる変化にも立ち向かう覚悟を持たねばなりません。そして「機に臨み、変に応ず」の精神で、コロナ前の考え方に“とらわれず、こだわらず、偏らず”の心を持って、1つ1つ道をひらきたいものです。

本年もあすなる会の皆様には多大なご支援を頂きましてありがとうございました。厳しい状況が続くと思いますが、来年も変わらぬご愛顧の程、宜しくお願い致します。

2020年12月吉日

## 松下電器産業 昭和二十二年度経営方針

### - 情勢に順応する信念に立つ -

敗戦後の混乱が続く1947(昭和22)年1月、松下電器産業(現パナソニック)の再建に臨む松下幸之助は、年初の経営方針発表会で社員にむけて、いかなる変化にも立ち向かう覚悟を持つよう訴えた。

### 昭和二十一年度を回顧して

「昨年(昭和20)は松下電器にとっても多事多難の年であった。昨年のわが国の状態を顧みると、あらゆる工場が民需生産へ急転換する一方、国民の思想は、民主主義の方向へ力強い進展を示すというきわめて革新的な動きの中に終始した。しかしその裏には、物資の欠乏、国民生活の窮迫という苦難が押し寄せた。(中略)

こうした中に、松下電器は一万余の従業員が一体となって、荒れに荒れた財界に棹さしてきたのであるが、その中でも“制限会社の指定”、“軍需補償の打切り”、“賠償工場の指定”“財界追放令の該当”の四つの重大な問題があった。これらはそのどの一つをとりあげても会社経営の根底に大きな動揺を与えるものであった。

しかし、わが松下電器には、そういうものを超越した使命があり、産業人の使命から見れば、この四つの問題も小さなものである。われわれは、ただ生産人としての天職を全うするのみである。この使命だけは、何ものもこれを蹂躪することはできない。われわれは常にかかる自責をもってよりどころとし、感激をもって生産に邁進してきたのである。

すなわち松下電器は、これらの諸問題に対するに、常にこれを一つの試練となして、確信をもってぶつかってきた。その結果、経営の上において何ら破綻を生ぜしめるようなこともなく、無事にすんできたのである。(中略)」

### 本年度経営方針の基本となるもの

「さて、本年はどう推移するか。私は、昨年よりもさらにむずかしくなると思う。なるほど昨年のように、個々の問題については問題は起こらないかもしれない。しかし本年は予測することのできない難問題が押し寄せるであろう。われわれは、これに対して深い決意がなければならぬと痛感するのである。(中略)

かかる状態下にあつて、会社としても一カ年の計画を立てることは、すこぶる困難である。さりとして私は、行き当たりばつたりの経営ではいけないことはよく分かっているが、今日かかる状態下においては、一カ年の方針を立てるということとはできない。やむをえず行き当たりばつたりの経営も覚悟しなければならない。

この考えを押しつめれば、時に応じて“融通無碍”、すなわち、どう変化しようなるとも情勢に順応して展開せしめるの信念に立つことである。われわれは、心常に緊張のうちに、何ごとに対してもただちに応じうるの構えがなくてはならない。しかも大切なことは、いかなる状態に直面しても、われわれはあくまでも動揺することなく、安心のうちに仕事を進めていくのでなければならないことである。もし、そういう器用なこととはできない、と言う人があるならば、それは完全に国家を破滅に導き、われわれもまた落伍者になるのみである。

私は本年の経営方針として、諸君に何よりもこれを強く訴え、諸君もまたよく了解してもらいたいのである。松下電器が過去二十数年間に於いて培ってきた伝統の真髄は、かかるときにおいてこそ、はっきりと顕現されると信ずる。もし顕現できなかったならば、われわれの過去は、何ものもない空虚なものであったということになるのである。諸君はまずこのような信念に生きてもらいたい。これがわが社本年の経営方針の根本である。」